



Title	協力と抵抗のゆらぎ : 漢文脈から読む中島敦「弟子」
Author(s)	Yang, Yihua
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2026, 12, p. 81-84
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106328
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

協力と抵抗のゆらぎ

—漢文脈から読む中島敦「弟子」—

日本文学・日本語史学 研究生（博士後期課程進学予定）

YANG YIHUA

はじめに

中島敦（一九〇九—一九四二）は、戦時、漢文調で創作した「山月記」『文学界』一九四二・二）が一九五一年以来国語教科書に掲載されたことにより、戦後「国民作家」として受容されてきた。小森陽一は、戦争文学を書かなかった作家としての位置づけと、中国古典を典拠とする作品が担った「贖罪的機能」^一を見出す。

本発表で扱う「弟子」『中央公論』一九四三・二）も『春秋』などを典拠に、孔子の門下生・子路の後半生を描く作品である。初出誌では「青年號に相應し」い戦争協力の作品として位置づけられ、戦後には漢文教材として受容され、戦争協力と「贖罪的機能」の相反する政治性へと回収され得る二重性を帯びる。しかし、その背景には戦時日本の漢学受容の分裂、日本へ醇化される漢学と、それに抗する学問的立場が併存していた。この相克する漢文脈のもとに創作された「弟子」が、戦時において戦争協力としてのみ読まれたことはありえただろうか。

先行論は、本作を戦争に無関係^二な漢文文学とするか、「当時求められた人間像」^三として戦争協力的側面を指摘するにとどまってきた^四。しかし、創作時の「大東亜戦争」が刻印された語り手の視線には、戦争協力に抗する意志が内包され、その具体的な検討はほばなされていない。

以上の問題意識をもとに、本発表では語りに注目し、語り手の近代意識・帝国日本の要素を析出し、戦時的視点から本作を読み直す。近代日本と中国古典物語を重ね合わせる中島敦の表現形式がいかに戦争協力と戦争への抵抗という対立する読みを可能にしているかを明らかにすることが、本発表の目的である。

一、語りの意識から見る孔子像

冒頭から「後世に残された語録」を超越する孔子像を描く語り手は、物語現在の後の時代に立脚する。古代中国の物語を綴りながら「古代支那式」などの記述を用いることに、「近代的な価値観を内面化」^五した語り手の意識が窺える。特に、子路が宰として仕える季氏は「魯国の内閣書記官長」という帝国日本の官僚職名^六で説明され、近代国家の枠組みから春秋時代の「魯国」を把握する視点が内在する。

政治家孔子像の造形においても語り手による時系列の操作が見られる。第六章にはその政績「中都の宰」「墮三都」「夾谷の会」が並び、まず「中都の宰」で「驚異的な治績」を挙げた敏腕な政治家像が構築される。続く「墮三都」は、魯侯を上回る三氏の私城を破壊する事業だが、典拠における「墮成」の失敗は捨象され、「孔子の適切な判断と指揮」による成功例のみの提示により、政治家、ひいては軍人・孔子の正当性が定着する。「夾谷の会」では、外交から礼思想を実践し、「勝利」を収める孔子が描かれるが、その「勝利」によって魯は斉にその国力を懼れられ、「美女の一団」

が贈られる。結果、朝廷は乱れ、「爾後永年に亘る孔子の遍歴」が始まる。

典籍によると、定公十年の「夾谷の会」は九年の「中都の宰」に続く孔子最初の政績だが、本作は十三年^七の「墮三都」を前置させた。この転倒により、外交的「勝利」と孔子の失脚は連続的に配置され、礼の実践による成功がかえって魯国と孔子自身の破綻を招くという逆説がなされる。また、時系列の操作は礼思想の意味付けにも機能し、礼秩序の回復を掲げる「墮三都」は私城の破壊という武力の行使でありながら「孔子の政策の第一」として位置づけられ、礼の実践は暴力から始まるものとなる。

以上、戦時日本に位置する語り手は、成功事例の選択と時系列の再配置によって孔子の政治的・軍事的正当性を構築しつつ、その内部に失脚と暴力性を織り込む。また、礼が武力行使の名目となる一方で、その実践の成功も破綻の契機へと転化する。この二重性において、孔子の政治的正当性のゆらぎは、礼思想そのものへの問いを開く契機として機能する。

二、師弟関係から見る子路像の変容

ゆらぎを見せる孔子に、敬愛をもつて従う子路は、礼思想の「形」だけは容易に受け付けない粗暴な弟子として造形される。

「礼なるものはすべて形から入」ると孔子は説くが、子路は「ものの形を軽蔑する男」であり、「形式主義への・この本能的忌避」を有する。郭玲玲は「形式主義」を嫌う子路像から、創作時における国家の統制する礼儀作法への批判を読み取る^八。当時、漢学の中心に位置する斯文会が政府の支援を受け、漢学の醇化―中国古典学でなく、日本の国体に適合させる、所謂「皇道儒教」―を推進するなか、国民教育には「各人の活動が統一」^九し、「国民錬成ノ目的ニ統合帰一セシムルコト」^十が求められた。しかし、孔子の教育は形式的・統一的なものでなく、子路に「特殊の個人」としての魅力を認める『論語』の因材施教の様子が描かれる。語り手は、国民錬成が求めた統合帰一的な儒教解釈から逸脱し、醇化以前の中国古典学としての漢文脈へと孔子像を差し戻している。

元来粗暴な性分の持ち主としての子路像は、孔子の言葉に見られる。子路が鼓舞する瑟の音に対して孔子は、「君子の音」でなく「暴厲の氣」「殺伐激越」だと批判し、その粗暴性は、師に向けられた悪言に憤り、即座に暴力へと走る子路の様子に実証される。「古の君子」は「腕力の必要を見ぬ」とその行為を叱る孔子に対して、子路は「いわゆる君子」は自分ほど強く怒りを感じないと、「君子」を相対化する。

孔子との遍歴を経て、衛国に留まった子路は「人氣の荒い土地」蒲の地の管理を任せられる。孔子の教えを胸に「有力者、反抗分子等」と「腹藏なく語り合」う子路のもと、三年後の蒲は「生育の氣を養う」「君子の音」に通じる治世の様子を見せる。つまり、粗暴だった子路が「君子」の行動原理を内面化し、武力でなく対話によって民を治める政治家へと変容する。この文治は、孔子が「中都の宰」として第一に行う礼の軍事的実践とは対照的である。本作の孔子像が武治と文治との両面を見せるなか、子路はその文治の思想を継ぎ、成果を収める。

しかし、子路は結局、再び武力の場に立ち、君子の「形」を守る「正冠」によって命を落とす。

三、「子路の死」の両義性

天皇制と戦争を正当化する「皇道儒教」に基づく理想的人間像と類似する読みを、

本作の語りは促しつつ裏返す。戦場で「人を殺すの中、また礼あり」という孔子に対し、語りは「一身の行動を国家の休戚より上に置く」ことを嫌う子路の献身を強調する。本エピソードは典拠『孔子家語』と大差ないが、「人臣の節」と反論する子路に「孔子もさすがにこれには一言も無い」との加筆に続き、典拠の返答「人を殺すに忍びざるの心あるを取る」の存置は、「君」への献身を強調しつつ殺戮への批判を両義的に含意させる。

献身的な子路もまた、「皇道儒教」の枠に収まらない。「魯国の内閣書記官長」の国概念の混同により、子路の言動は戦争協力の文脈に傾くが、主君を救う根拠は「孔家の禄を喰む」に基づく忠誠であり、無条件の献身を求める「皇道儒教」の忠孝一致とは異なり、春秋時代の君臣相互の礼秩序に向けられている。

実際「子路の死」は、斯文会の漢学醇化と距離を置き、古典学として漢学研究をつづけた竹内照夫の『春秋』^{十一}を参照し、典籍の伝文には見られない「群衆」への関心を受け継ぐ。「見よ！君子は、冠を、正しうして、死ぬものだぞ」という子路最後の絶叫は、村田秀明が指摘するように「時局に流されることなく」「学問に専念しようとする」^{十二}竹内との共振を見せる。

死と群衆に関しては、「泄治の諫死」をめぐる討論にも見られる。「区々たる一身をもつて一国の淫婚を正そうとした」泄治の死を「無駄」と批判する孔子に対し、子路は「天下蒼生の安危」「国民の気風に与える影響」からその死に義を認める。師に逆らって死を選ぶ行為は、「孔子」を教育・師範的権威として奉る斯文会に代表される「皇道儒教」への反発を示唆する。要するに、「君子」を「正冠」の「形」で群衆に示すその死は、醇化された漢文脈に読まれつつも、回収され得ない己を保持する両義的な構造をなす。

子路の死後、醢を「一切食膳に上さなかった」孔子の描写で物語は閉じられるが、先行論は本作を子路の物語として捉える立場から、この結末を批判する傾向にある^{十三}。しかし、醢と料理の組み合わせは儒家經典において、食礼の一項として記されている。山内麗は礼より感情を優先させる孔子像^{十四}を見出すが、礼を貫いた「子路の死」に続く食礼「醢」の提示は、その死の両義性のが醇化された漢文脈に帰さぬことを物語の内側から示す鍵であり、戦争協力的に読まれながらも「語録」として伝承された子路と孔子の物語である本作を、中国古典学としての漢文脈からの読みを要請するものとして、本発表はこの結末を位置づける。

まとめ

戦時における漢文脈が斯文会的「皇道儒教」と、それに抗する伝統的な中国古典学と分裂する中、本作の語り手は帝国における政治語彙と史実の再配置により、孔子を有能な政治家として構築しつつ、その礼の実践に武力と破綻を織り込む。同時に、「皇道儒教」から逸脱する殺戮批判・因材施教の孔子像も子路との師弟関係により造形していく。

子路はその教育のもと、粗暴な弟子から文治を担う政治家へと変容する。国家への献身を読ませる筋をなす一方で、殺戮を批判する孔子の言葉と群衆を意識した君子の「形」に支えられた「礼」の行為であるその死は、「皇道儒教」への全面的な回収を拒む。戦時日本と中国古典を重ねる漢文調により、孔子の軍人像と殺戮への批判、子路の献身と君子の内面化の二面性が構成される。本発表は、表層に戦争協力とそれ

を抵抗する内核、二つの読みを可能にした作品として「弟子」を位置づける。
展望として、孔子の死生観が課題として残される。「靈魂の滅不滅」の問いに対し
て真理の断言を避ける場面には、言論装置を見据えた孔子像が窺える。中島敦の絶筆
「章魚木の下で」と合わせ読むことで、戦時の言論をめぐる思考として本作を捉え直
す視角を開くことが可能となる。

- 一 小森陽一『へゆらぎ』の日本文学』日本放送出版協会、一九九八年九月、二二八～二二九頁
- 二 陳佳敏『中島敦とその時代——人間認識の場としての植民地（朝鮮、中国・満州、南洋）』宇都宮大学博士論文、二〇一九年三月、二頁
- 三 山下真史「中島敦『弟子』論」『中央大学文学部紀要』（一九九）二〇〇四年三月、一六一頁
- 四 趙楊『中島敦作品研究——戦時の軌跡』大阪府立大学博士論文、二〇一五年、一一〇～一一一頁
- 五 山内麗「敬愛しながら反発し、反発しながら敬愛する…中島敦「弟子」論」『札幌国語研究』（三〇）北海道教育大学国語国文学会、二〇二五年十一月、九五頁
- 六 「内閣書記官長」は一八七九年、太政官達により設置され、内閣制度の創設と共に常設職となり、戦後GHQの占領統治下、「内閣官房長官」に改められた、「帝国日本」の官僚制度に属す職名。
- 七 『史記』の記載による。『春秋左氏伝』においては定公十二年。
- 八 郭玲玲「中島敦『弟子』論…己を堅持する子路像の成立をめぐる」『東アジア研究』（十三）山口大学大学院東アジア研究科、二〇一五年三月、四一頁
- 九 文部省編『國体の本義』文部省、一九三七年三月、一五二～一五四頁
- 十 文部省普通学務局編『国民学校令及国民学校令施行規則』内閣印刷局、一九四一年五月、五六～五七頁
- 十一 竹内照夫『東洋思想叢書2 春秋』日本評論社一九四二年四月
- 十二 村田秀明『中島敦『弟子』の創造』明治書院二〇〇二年十月、一〇七頁
- 十三 濱川勝彦『中島敦の作品研究』明治書院一九七六年九月、二六六頁。宮田一生「中島敦『弟子』論」『日本文藝研究』四八（四）関西学院大学日本文学会、一九九七年三月、六〇～六三頁
- 十四 山内麗前掲、一〇四頁